

ほんま、元気ですわ、この人たち

プルビチャチュ初登頂登山隊の新年会に思う

OWCC 中川和道 20260610

2026 年 2 月 17 日、プルビチャチュ初登頂登山隊の新年祝賀会が開かれた。祝宴のポイントは、単行本『遙かなるプルビチャチュ』(写真 1)の出版だ。1982 年の遠征当時、読売新聞記者として何度も記事(写真 3 は 1982 年 6 月 5 日の読売朝刊から)を書いて下さった中島広氏も駆けつけ、祝辞をいただいた(写真 2)。

ほんま、元気ですわ、この人たち。えらいご老人ばかりなのだが、話がプルビチャチュとなると、とたんに目に光がよみがえり、きっぱりと若返る。

みんな若い。例えば、写真 4 の右端で V サインを示す黒川慎太郎さんは、「昔ヒマラヤ今は海」とか豪語してヒジキやらナマコやらを採って来て、登山隊みんなへのお土産にする。写真 2 の中島広氏の隣でにこやかな笑顔を見せる藤川櫻彦さんは、日本 300 名山に挑み、「あと 2 峰で達成」という馬力の持ち主である。遠征前にランニング 1000km を達成した猛者は、今も健在という訳だ。安田一郎隊長は、藤川 300 名山が達成されたら、それを機にまた集まろうぜと期待を示す。

中川は 2024 年 3 月のプルビチャチュ 42 周年記念集会の実施に協力した。初登頂 45 年の 2027 年まで待つのでは、ご高齢のどなたかが体を壊す可能性もある。だから、まずは 42 周年だと思ったのだった。ところがめでたく全員元気。今回の祝賀会で 45 周年の大宴会が射程に入ってきた。

ほんま、元気ですわ、この人たち・・・

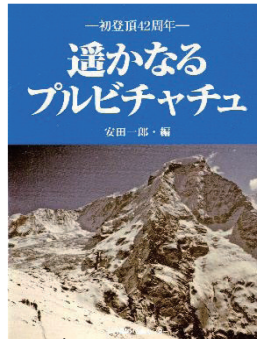


写真 1



写真 2 中島広氏



写真 3



写真 4

西本武志さん 残照の断片 2

「イチメートル」と「個人会員制」のこと

OWCC 中川和道 20260611

西本さんと中川が交わってきた討論を振り返り、表題の 2 点を取り上げる。

イチメートルのこと

1990 年ころだっただろうか。「あのね、『イチメートル』って正しいよね？中川さん」。「はっ？西本さん、何を言ってるんですか？」。「あのね、1 m の墜落で、人は命を取られるよね、だから、**1 m は一命取る**(イチメートルはイチメイトル)、こう俺が言い続けてきたことは、正しいよね？中川さん・・・」。はあ、正しいには正しいんですけど、まさしく、オヤジギャグの響きだなあ。登山界には中川みたいなひねくれ者が多いから、表面的な響きだけ聞いてあとは聞かない、無視していいオヤジだと判断し、思考スイッチをストップ側に倒してしまう輩も大勢いそうだ、「山道歩きの分野でもヘルメット着用の運動を大々的に進めたい」という西本さんの真心をちゃんと聞いてくれるかなあ、と中川は心配です、とか何とかお答えしたことを覚えている。西本さんの着眼は早かった。折りたためるヘルメット(写真 1[文献 2])が Edelrid 社から発売されたこともこの動きの後押しとなった。

長野県山岳遭難防止対策協会が「山歩きでもヘルメット着用によって墜落死亡事故が防止できた」などのデータに基づいた勧告を行い、山小屋がこぞってヘルメットのレンタルを始めた([文献 1]1993)。

写真 1 の西本ヘルメット、中川は、教材として受け継ごうと思う。うまく伝わればいいのだけれど。



写真 1. 西本武志さんの Edelrid ヘルメット。
左右部と後部が内側に折りたためる。

個人会員制のこと

労山でかつて大きな議論になった個人会員制について、運営の渦中におられた西本さんに中川は申し訳なく思っている。仕事戦士一点張りだった中川は、議論に十分に参加せず、関与を完全にさぼったからだ。間違い承知で言うのだが、中川は、労山が現在の連盟制をやめて、昔の勤労者山岳会や今のドイツ山岳会(会員数十万人)のように、個人加盟制の全国単一山岳会に移行するという議論を始めたのだと勘違いしていた。

当時的大阪府連執行部から漏れ聞いた印象では、労山全国総会で行きついた案は、何と、(1)現行の県連盟を残したまま個人加盟の山岳会も併設する、(2)実証実験を行うという名乗りを上げた地方連盟が皆無だったため実証なく議論のみで結論を得る、となったらしい。こりゃ自滅の路線だと中川は思った。

ドイツ山岳会の現在のみを検討することは意味がない。そうではなく、調査団を派遣して、その形成期の 1 人→10 人→100 人→1000 人→1 万人→10 万人→数 10 万人という規模増大の度に、どんな議論を行い、どんな試行錯誤のもとに、組織をどう変えて今に至ったのかという研究を 5 年がかりでじっくり始めた方がよい、と中川は思っていた。きちんと進言できないままに時は過ぎ、個人会員制は実質破産した。西本さんが中川に多くを語ることはなかった。すまない気持ちが中川には今も強く残っている。西本さん、ごめんなさい。

そもそも労山に勢いがまだあったあの時期には、個人加盟制は、受容困難な提案だった。だが、組織論の議論は通奏低音のように深部に残り続けるだろうと中川は思う。例えば、山岳会が衰退して維持できず、県連盟も維持できなくなるかもしれない。そうなったら全国単一山岳会の再検討の機運がまた始まるかもしれない。その時には、違った視点での研究による検討がまず必要だ。

[文献 1]長野県山岳遭難防止対策協会「山岳ヘルメット着用奨励山域の指定について」、1993 年 8 月 25 日、
[helmets.pdf](https://www.pref.nagano.lg.jp/kankoki/sangaku/documents/helmets.pdf) <https://www.pref.nagano.lg.jp/kankoki/sangaku/documents/helmets.pdf>

[文献 2]西本武志「折りたたみ式ヘルメット」、『山の雑学百科』、「岳人」編、2013 年発行、p.30。